れに対して、通常のレストランの場合の粗利は、来客数を二五人とした場合に一七五〇〇円となっています。原価率三〇パーセントでもそれほど儲かっていません（計算式①）。この粗利から、人件費、家賃、水道光熱費などを差し引くと、ほとんど儲からない場合もあります。ランチ・バイキングの場合は、原価率三〇パーセントが確保できれば十分な粗利が出ています（計算式②）。仮にラグビー部や相撲部の部員のような体育会系の大食いの人がたまたま訪れたとして、原価率が四〇パーセントに跳ね上がったとしましょう（計算式③）。これでも十分な利益が出ることがわかります。利益を出すうえで、原価計算がいかに重要であるかがご理解いただけたかと思います。また、お客さんの回転が良いこと（＝売上増）が、結果として粗利を増やすという点もご理解いただけるかと思います」。

表②

計算式①
1日の来客数が25人の場合（通常のレストラン・お昼）
売上高　ランチ定食1,000円×25人＝25,000円
原価　原価率30%として　25,000円×30%＝7,500円
粗利　25,000円－7,500円＝17,500円

計算式②
1日の来客数が60人の場合（ランチ・バイキングの場合）
売上高　ランチ・バイキング1,500円×60人＝90,000円
原価　原価率30%として　90,000円×30%＝27,000円
粗利　90,000円－27,000円＝63,000円

計算式③
売上高　ランチ・バイキング1,500円×60人＝90,000円
原価　原価率40%として　90,000円×40%＝36,000円
粗利　90,000円－36,000円＝54,000円

(95) 同前、一一八～一三四頁。飲み放題の仕組みについては、次の如くである。

「飲み放題の平均値は四～五杯だそう。そうすると男性で一二五〇円÷五杯＝一杯あたり二五〇円。通常の値段が一杯三八〇円と計算すると三八〇円－二五〇円＝一三〇円のお得。×五杯で六五〇円。これでは儲からないのではと思うのは早計。飲み放題は通常コース料理に付随してますね。そこで二七〇〇円コースの一品あたりの単価を計算すると三〇〇円。一皿三〇〇円とみなすと九皿×一二人＝一〇八皿がテーブルに並ぶことに。つまり、料理でこれだけの量を注文したのと同じことになるわけです。だからドリンクの利益は最初からなかったものと思い、フードだけで二七〇〇円の売上があったと割り切り、二時間の制限を付けて二回転でもすれば十分利益は確保できるという仕組みなんです」。

ヨンヒル・カン『イースト・ゴーズ・ウエスト』における科学的管理法——日米による朝鮮人労働者の構築

デイヴィッド・S・ロウ／宋恵媛訳

訳者解説

本論文の原題は“Scientific Management in *East Goes West*: The Japanese and American Construction of Korean Labor”である。MELUS: Multi-Ethnic Literatures of the United States37.1 (2012 Spring) に発表された。筆者のデイヴィッド・ロウ (David. S. Roh) ユタ大学准教授には、『テクノ-オリエンタリズム』（共著）（*Techno-Orientalism: Imagining Asia in Speculative Fiction, History, and Media*. New Brunswick: Rutgers University Press, 2015）や『違法な文学』(*Illegal Literature: Toward a Disruptive Creativity*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2015）等の著作がある。

分析対象の小説『イースト・ゴーズ・ウエスト』（東洋人、西洋へ行く）は、植民地期にアメリカ留学をした朝鮮人青年の物語である。意気揚々と米国へ足を踏み入れた主人公ハン・チュンパが、そこでの様々な経験を通してアメリカ社会の一員として受け入れられないことを次第に悟り失望していく様を描いた、作者の自伝的小説である。

朝鮮人初の英語作家として知られるヨンヒル・カン (Younghill Kang／姜鏞訖（カンヨンフル）／강용흘) は、一八九八年に咸鏡南道で生まれた。科学を学ぶため一九一五年に日本へ密航し、後に神戸で数学教師としても働いた。その後朝鮮に戻り、一九一九年の三・一運動の際には投獄を経験した。一九二一年、米国人宣教師の手助けで渡米し、その後カナダのダルハウジー大学へ進学、翌二二年に米国へ移り、ハーバード大学やボストン大学で科学や英語教育を修める。一九三一年、渡米前の朝鮮での生活を描いた『草葺きの屋根（*The Grass Roof*）』を発表し、好評を得る。同作品はドイツ語やフランス語にも翻訳された。その後、小説執筆のための奨励金を得てローマとミュンヘンへ一時的に居を移す。一九三七年に『草葺きの屋根』の続編といえる『イースト・ゴーズ・ウエスト』を発表。以後、ニューヨーク大学助教授、メトロポリタン美術館の極東担当キュレーター、米軍の日本語学校校長、

米軍教育局の言語コンサルタントなどを務める。第二次世界大戦終戦後は、四五年から四八年にかけて当時の南朝鮮で米軍政庁に勤務した。その後は米国で朝鮮詩の英訳に取り組んだ。七二年没。

この論文は、従来のコリアン・アメリカン文学研究が、主に「アジアン・アメリカン文学」という大きな枠組の中で論じられてきたためにこれまで等閑視されていた、〝日本〟という第三の要素を導入することの重要性を唱える。それは、日本を通して〝朝鮮性〟を検討し直すことにもつながるものといえよう。アジアン・アメリカン文学研究の先駆者であるエレイン・キムによれば、一九九二年の「ロス暴動」以降、コリアン・アメリカンの作家たちが自らの朝鮮というルーツをその歴史とともに探り、作品化する傾向が起ったという。じっさい一九九〇年代後半以降、ノラ・オクチャ・ケラー『慰安婦（Comfort Woman）』（一九九七年）、スーザン・チェ『外国人学生（*The Foreign Student*）』（一九九八年）、チャンネ・リー『ジェスチャー・ライフ（*A Gesture Life*）』（一九九九年）など、植民地支配、日本軍「慰安婦」、朝鮮戦争等を主題として取りあげた文学作品が急増した。D・ロウ氏の論考の新しさは、このようなコリアン・アメリカンの社会史・文化史の流れと、グローバル化を背景に深化しつつあるトランスナショナル・アジアン・アメリカン研究の潮流が交錯する場所で書かれた点にあるといえる。

＊［　］は原注、〈　〉は訳者注

私は、能率を単なる技術や方法として扱いたくはない。人間の道のほかに能率があるのではなく、人の道がすなわち能率であることを主張したい。

——『上野陽一伝』

過去には人間が最優先だった—未来にはシステムが最優先にならねばならぬ。

——フレデリック・テイラー『科学的管理法の原理』

システム、システム、システム

——フォード工場を訪れた『デトロイトジャーナル』レポーター

一九二〇年代のニューヨーク。ブルックリン橋をぶらぶらと渡っていた二人の男が、立ち止まって街並みを眺めている。朝鮮人学生のハンは、きらめく建造物が織りなすニューヨークの壮大な眺めを堪能しているが、その先輩のキムは隣でしかめっ面をしている。ハンはこう感慨を洩らす。

すばらしい光景だな！たそがれを背景にしたアーチ状の市庁舎、長い柱や高いタワーの数々。ヴェニスのグ

ラン・カナル、漢陽（ハニャン）〈現在のソウル〉の漢江（ハンガン）のリズムとはなんと違うのだろう！……［この街］は、人間と機械の世界、大量生産の世界、壮大で巨大な建造物をつなぎ合わせている…。せまい空間で短期間のうちに全て出来上がった。昔だったら、完成までには代を継いで何百年もかかっただろうに…。職人たちはうんざりするような単調さに耐えながら働き、技術者たちは型通りに設計しただけなのかもしれない。でもその完成品は、特有の独創性というアメリカの時代の記念碑（モニュメント）とともに生まれるんだ。正確で、精密で、迅速で、的確で、力強い。（『イースト・ゴーズ・ウェスト』二四五頁）

ニューヨークのスケールの大きさ以上にハンを驚嘆させるのは、それらの記念建造物が迅速かつ正確に造られたという事実だ。〝能率〟、つまりヨーロッパやアジアとはあまりにかけ離れた「リズム」はハンを魅了するものの、同時に不安に陥らせもする。驚嘆の裏でハンは、ビル建設のためには個人の犠牲が必要であることを暗黙のうちに認めている。労働者も設計者も、匿名性の退屈の中で働かなければならないのだ。

他方のキムは、もっとシニカルな見方をしている。

「この島は」、彼はぽそっと言った。「岩だらけなんだ。だからこれ以上育ちはしない。だが住人はどんどん増える。田舎の農地から今のニューヨークが生まれてから、たぶん一世紀も経っていないだろう。今では、堕落したり追われたりした人間たちが、この大都市の成長を助けるために集まってパニックを増大させている…そう、どこにどう真理があるのかを説明しようとする科学なんて、ぼくには何の役にも立たないんだ。その科学が単純か複雑か、特殊か一般的かにかかわらずな。（同、二四五—二四六頁）

おそらくキムの失望は、人間中心主義の軸を失い、〝能率〟によって支配されたアメリカに対する、暗い近代主義者の見解を反映したものだろう。彼はニューヨークという都市を、とめどない拡張を増幅させる疎外された人々の集合体と捉えている。ハンの分身でもあるキムは、目的なき能率性を受け止められない、あるいは受け止めたくないがために、近代から救いようもなく取り残されているのだ。

『イースト・ゴーズ・ウェスト』（一九三七年）の作者ヨンヒル・カンは、この二つの異なる視点を用いながら、この小説の論点を定める。それは、素晴らしくも恐ろしい

〝能率〟によって達成されうるあらゆるものへの警告だ。自伝的要素の色濃いこの小説は、主人公ハン・チュンパの渡米と、そこでの勉学の日々が年代記の形で綴られている。ハンは勉学と並行して取るに足らない数々の仕事をこなすが、それを通して自らの人種的な限界を知る。また、アジアでは芸術や文学は尊重されるが、アメリカでは一顧だにされないことにも徐々に気づいていく。容赦のない能率性と市場原理、それが全てを支配しているのだ。

ハンとキムの見解は複雑さを含んでいる。なぜなら二人は、旧植民地出身者という立場から発話しているからだ。輝かしい植民地本国（メトロポール）の勃興と、田舎出の食い詰めた大衆。彼らにとってこの光景は、植民地朝鮮と帝国日本が初めて出合ったときのそれに似た、見慣れたものだったことだろう。アメリカ的な〝能率〟に対する二人の見方の背後に隠されているのは、過去の残響、つまり日本的な能率主義だ。ハンは、この能率主義に名前があることをアメリカで知ることになる。テイラーだ。

本稿では、ヨンヒル・カンのアメリカ資本主義批判を、植民地労働と製造技術というより広い議論の一つとして再構成していきたい。『イースト・ゴーズ・ウェスト』の先行研究の多くは、アメリカ文化物質主義（カルチュラル・マテリアリズム）批判に焦点を当てている。これに対し筆者は、能率性のメカニズムである〝テイラリズム〟に着目し、日本とアメリカをつないでいきたい。[1] ハンの称賛するニューヨークの高層ビル群は、長い影を落としている。それは太平洋を越えて伸び、東京を照らす。なぜならテイラリズムは、一つでなく、二つの近代主義のプロジェクト―アメリカの近代産業主義と大日本帝国内の植民地近代性―を故郷に持つからだ。[2]

さらに、これら二つのプロジェクトにおいて、製造技術がそれぞれの場所の条件下でどのように〝人種〟の構築に寄与したのかを示したい。アメリカと日本の産業主義の堅固な結びつきは、いかに労働者がテイラリズムによって組織的に人種化（レイシャライズ）されるかをよく表している（同じことは、少数民族集団たちの場合にも当てはまるだろう）。現在の人種の修辞法を使うなら、テイラリズムは労働力を必ずしも技術や教育によってではなく人種で計測する、と言い表せよう。本稿では、ヨンヒル・カンが小説で展開する、階層化された経済システム内における人種批評を、米国から組織的労働管理を輸入した日本において少年期を過ごした彼自身の体験と結びつける。

そして最後に、〝アジアン・アメリカ〟の議論において、アジア統合を唱えるトランスナショナリズムをめぐる、より大きな対話の中に本稿を組み込んでいく。最初の小説『草葺きの屋根』（一九三一年）でも、二作目の『イースト・ゴーズ・ウェスト』でも、日本の存在感は大きなものだ。ヨンヒル・カンは日本の教育を受け、後にはアメリカの軍事作戦の一環だった反日プロパガンダの仕事に携わった。このような事実にもかかわらず、先行研究では帝国日本は視界の外に置かれてきた。[3] 〝日本〟という要素を組み入れることは、作者の多面的なアメリカ観をよりよく理解するために必要な第一歩である。というのも、米国で直面したのと類似した非人間的なシステムに初めて彼が出合ったのは、植民地のプロジェクトにおいてだからだ。日本という場所の介入は、故郷―移住先という、初期アジアン・アメリカン文学や理論にみられた二分法を複雑化するものである。スーザン・コーシーが述べるように、「民族性（エスニシティ）は、通過、帰還、到着という複数の場において、国家間および国家内部の動きのなかで変形する」からだ。ヨンヒル・カンの小説は、彼の生い立ち自体が示しているように、コリアン・アメリカンの主体形成における強力な媒介者たる〝日本〟を、書き込み直す必要性を証明するものとなっている。[4]

米国と日本におけるテイラリズム

一九一一年に出版されたフレドリック・テイラーの『科学的管理法の原理』は、ヘンリー・フォードと同様、機械よりも労働に焦点を当てることで能率と無駄の問題に迫った。[5] テイラーは、流れ作業で同じ作業を繰り返す労働者たちは、人間の先天的な怠け癖から、一番遅い人のペースに自然に合わせると考えた。テイラーのいうこの「怠け者」は、一貫作業列では罰せられることはない。だが、義務完遂のための「たったひとつの最良の方法」を教えることで、この問題に対処できる。その鍵となったのが、仕事をより小さな単位に分割することだった。仕事の適性に応じて、科学的に選別された労働者によって遂行されるようにするためだ。[6] 能力の低い労働者たちには、反復的で単調な仕事を任せると最大の結果が得られる。利口な労働者たちにはより複雑な仕事が与えられる。フォーディズムが機械の配置と労働者がそれをどうサポートするかに焦点を当てたのに対し、テイラリズムはその最も純粋な意味において、能率化され効率化されるべき〝機械〟として労働者たちを捉えた。[7] テイラーの管理システムは、現場監督の監視と、その掌中のストップウォッチのチクタクという音の下、仕事、時間、動きを計測可能な単位に分割したのだった。

だが、両者ともかなりの批判を受けた。フォーディズムとテイラリズムは、文化的現象として短期間で一気に注目を集めた（例えば「フォード化しなければ失敗する」、テ

イラーからアイディアを得た「能率熱」など）が、それに対する批判も激烈だった。[8] とりわけテイラリズムは、即座に爆発的な労働者の反対に見舞われた。デイヴィッド・モントゴメリは、ロード島プロヴィデンスにあるニューイングランドボルト会社の機械工たちの、驚くべき実態を詳しく記事にしている。モントゴメリは次のようにロード島を描写する。

> 労働者たちの前にカメラがある。背面にもカメラ。右にもカメラ。左にもカメラ。「間違った動き」を排除するために全ての動作が撮影された写真は、労働者が見張っている機械と同じくらい機械的になるよう、人々を操るのだ。

モントゴメリは、労働が引き起こすパニック感情の噴出は、労働者の服従心が偽りであることを物語っていると述べる。またたく間に従業員たちの間に広がったテイラリズムへの怖れは、集団的不安の引き金となった。

> ストップウォッチ、タイムカードの登場、あるいは標準化を意味する機械のカッターや台、Tボルトの測定ですらも、不安に駆られた熟練工たちの集会、ストライキ、組織側の協力者とみなされた人々への暴力の引き金となった。（二四七頁）

今からみると、労働者たちによるテイラリズムの全面拒否は当然のことのように思える。管理側と労働者たちの経済的利害が合致することはまずないし、個人を無視する科学的管理によって労働者は非人間化された。結局、フォーディズムもテイラリズムも、より緩いバージョンへと改変されたため、その支持は凋落していった。

太平洋の向こう側の日本人製造業者たちは、熱い関心を持ってこれを見守っていた（Koizumi 二九—四九頁）。明治期の暴力的なまでの社会政治的な産業化の激変を経た後、産業界のリーダーたちはフォーディズムとテイラリズムを学び、後にそれを生産システムの中に組み入れた。[9] 自前の能率増進運動にテイラリズムを統合しはじめたとき—それは第二次世界大戦にも持ち込まれた—、日本の産業界は労働者不足に直面し、労働力を植民地に外注したのだった。

テイラリズムは急速に広まった。米国でそうだったように、産業界にとどまらない短期間の〝能率増進運動〟に火を付けたのだ。ジャーナリストの池田藤四郎は、テイラリズムに関する一連の記事を発表した。「労働の大革命が、作業現場から営業部門にいたるまでアメリカを席巻している。これは科学的管理なるものを使用したものだ」（Tsutsumi 一九頁から再引用）。〝日本のテイラー〟こと上野陽一は、この原理を食生活や交通など、自らの生活のあらゆる部分に適用しようとした。「最も能率的な台所の配置、最も能率的なゴルフのスウィング、真珠採りにおける「たった一つの最良の方法」」といった大真面目な研究で、他の人々もこれに続いた（同、二四頁）。

しかしツツミが指摘するように、テイラリズムは変形されずにそのまま輸入されたわけではない。明治期の近代化政策により、西洋との接触は避けきれないほど起こったとはいえ、日本は西洋からの輸入物を長いこと猜疑の目で見ていた。ナショナリスト知識人たちは、技術と精神を分離する〝和魂洋才〟（Koizumi 三〇頁）を考案することで辻褄を合せた。[10] ヨンヒル・カンも、「「日本人」は、他人の技術を適用し真似することにかけては天才的だ」と記している（"When" 一一〇頁）。日本はテイラリズムの帝国主義的野望を増幅させた。テイラリズムは、人種（レイス）／民族（エスニシティ）で線を引いて労働者たちを階層別にふり分けることにより、平等主義を排した、能率性のための理想的な生産イデオロギーとなった。ヨンヒル・カンは、このような文脈の中で、日米の科学的優越性の根拠となる西洋の知を獲得しようとしたのだった。だが、彼の目的は果たされることはないだろう。

「機械化時代」

ヨンヒル・カンは一九二一年に米国にやって来た。この頃アメリカでは、自動車の産業化が急速に進みはじめていた。工場の流れ作業がいかなる影響をもたらすかを、じかに目撃したのだろう。[11]『イースト・ゴーズ・ウェスト』からは、産業化と資本主義の本性についての作家の深刻な憂慮が読み取れる。とりわけニューヨークは、主人公のハンが後に批判することになる〝機械〟を体現しているようだ。

> ニューヨーカーたちの動作には、全て何らかの目的がありそうにみえる…。ショーの見物に行ったりその手配をしたりする時でさえも、ビジネス的な雰囲気が漂う。全ての行動は断固として規律正しく、目的に満ちている…自分が何をしたいかを正確に把握しているに違いない。移り住んだばかりのニューヨークで、他人に打ち負かされないようにするためには、展望と計画を持たねばならないのだ。自由、事実主義、ここではいつも原因から結果へと理由づけをする——あまり考えたりすることはない。知性による解決ではなく、知

能の測定をするのだ。未来の預言者、洞察力のある詩人…おそらくアメリカ人はこういった類ではない。科学的ツールにとり囲まれた、優れたセールスマンだ。彼の精神はグランドセントラル駅のようだ。確定的で、時間管理されていて、輪郭のくっきりした礎石上の数学的正確さがある。なるほど単調で愚鈍な繰り返しはあるだろうが、全てが正確で意識的だ。馬鹿げた型通りの行動が時折あっても、その背後には任務らしきものがある。あらゆる角度と線は計測されているのだ（一五二頁）。

先に引用した、抑圧的な時間管理の描写とよく似たこの印象的な文章は、お定まりの躁状態にあるニューヨーカーたちを、「科学的ツール」に囲まれた、テイラリズム理論の臣民（サブジェクト）として描き直したものだ。ここでは、はたしてニューヨークが〝個人（インディビジュアル）〟の本場なのかという疑問が投げかけられている。じっさいヨンヒル・カンは、ニューヨーカーたちを自己の意思を貫徹する人々としてよりも、むしろ部品の生産者もしくは部品そのものとして風刺的に描写している。彼／彼女は「打ち負かされない」よう、街のヒューというハミングの音に歩調を合わせねばならない。ニューヨーク街路のエネルギーと工場労働とをつなぎ合わせることで、ヨンヒル・カンは当初には手放しで称賛していた事柄を、ひいき目とはとても言えないようなトーンで遠くから位置づけ直す。〝機械化時代〟は多面的な価値を持つ。ニューヨークは近代テクノロジーの輝かしい代表であると同時に機械そのものである。したがって、アメリカの個性なるものが誤りだということが再認される。実際のところ、それは専門分化なのだ。それぞれが細分化された役割を流れ作業台で果たしている。ニューヨーカーたちの急ぎ足は、テイラーのシステムでいう、機械のように能率的な労働者であることの表れなのだ。

テイラリズムの論理と個人の喪失は連関性を持つ。このことは、研究者が一つしか専攻を選べないという専門教育における〝洗脳〟への、ハンの急騰する反発にはっきりと表れている。ここでは「単調で愚鈍な繰り返し」の生活が必要とされるのだ。

私の中の何かが、ずっとそういった専門化に反発した…たとえば、釘を打つなど特定の細かい作業で機械作りに携わる人、といったような。その人の生涯の仕事は、いうなれば一つの狭い分野で一つのルーティーンワークを繰り返すことだ。彼はその巨大な機械の偉大な創造者ではないが、それは機械の見取り図を失ったせいだからではない。機械に吸収されてしまったからであり、その下僕だからだ。それは彼のものではないのだ…惨めな近代の人間よ…（二八三頁）

大きな経済効率のシステムの一部分となることを恐れるハンは、大学教育にも疑念を抱く。自分の専門はこれだと宣言することは、ある種の降伏といえる。「「その」専門を操る」ことのみに専心し、「決して造物主となることはない」（二八三頁）からだ。ハンは、知識人の近視眼的な思考と、流れ作業での苦役を融合させる。そして専門化というものが、課業〈一日の基準仕事量〉を重視した細分化というテイラリスト哲学だと批判する。彼は自らを知識の流れ作業の労働者に例える。あまりにも専門化された仕事に携わっているために、完成品、工場の壁、さらにはフェンスの外にある全てのものを、一歩引いて見渡すことができないのだ。

ヨンヒル・カンの管理科学への嫌悪は、植民地朝鮮および大日本帝国〝機械〟についての見解に根差しているとみられる。彼は両者を管理科学と結びつけるが、このことは以下のような説に重みを持たせるだろう。すなわち、彼の米資本主義の否定的影響についての批判が、産業労働者や民族マイノリティを超えたところにまで及んでいること、かつその批判が、植民地近代および国境を超えた〝植民地化された主体（サブジェクト）＝臣民〟たちの形成に、米資本主義が積極的に関与していることを指摘していることだ。

機械化と科学的管理に対するヨンヒル・カンの拒否は、戦時という文脈においても重要である。銃を例に挙げながら、過去の技術の移植について説明してみよう。一五四三年、ある日本の商人がポルトガル船からライフル一式を買い、その複製を作るよう地元の刀工に注文した。しかし刀工たちは、その技術を模倣できなかった。その理由の一つは、製造が標準化されていなかったことにあった（Koizumi 三三、三四頁）。ポルトガルでも当時はライフルの大部分は個別に作られていた。だが日本の銃工たちとは違い、ポルトガル人たちは標準工具を使用することができたのだ。[12] テイラリズムが日本へ導入されると、武器は管理の革新を再び呼び起こすことになった。米英での二年におよぶ兵器工場の視察から戻ってきた技術者、伍堂卓雄は、そこで学んだことを呉海軍工廠の製造システムに取り入れ始めた。

〈そのシステムは〉労働のさらなる細分化、集権的計画、ストップウォッチタイムスタディ〈ストップウォッチ法〉、コスト計算、ガントチャートの追跡、作業

手順書の手法など、製造工程の革命を必要とした。科学的管理の技術をすべて網羅した〝限界ゲージ〟は、複数の職長（専門的管理者）たちが工場労働者の管理業務を分割する複雑な組織プログラムである、〝職能的職長制〟という問題含みのテイラリストの処方箋をも活用した。（Tsutsumi 三二頁）

科学的管理は、戦争という劇場（シアター）に引き寄せられる傾向がある。それはおそらく、戦争の持つ緊急性が労働争議などを押しやり、テイラリズムを制約なしに作動させるためだろう。ヨンヒル・カンは、兵器技術が劣っていたことが朝鮮の被支配につながったと述べている。「朝鮮は近代兵器を持たなかったために、日本の統治に表立った抵抗ができなかった」（"Prelude" 一一頁）。朝鮮人労働者たちは、まさにこの軍事的緊要性によって、日本の管理システムへと組み入れられたのだった。

一九三七年の『イースト・ゴーズ・ウェスト』出版の頃までには、植民地朝鮮では著しい経済的変化が起きていた。産業化と近代化を要請する日本の政策により、一九二〇年代から地方の人々が大量に都市へと移動し始めた。一九三〇年代になると、産業の成長によって農業における大量の過剰労働力を吸収しはじめ、地方から都市へと人口を絞り出していった。その約半数は国内の産業へと向かい、残り半分は日本と満州に移住した（Park 一六頁）。一九三〇年から一九四〇年にかけては、百万名を超える志願労働者がより高い賃金を求めて移住した。そして残りの百万名は、産業労働者やいわゆる「慰安婦」として強制的に移動させられた（堀、一一四頁）。一九四〇年までには、一二四万人の朝鮮人が日本に在住していた。その大部分は日雇い労働者で、他の低技術職に従事する人々もいた。

スンウォン・パクの小野田スンホリ（勝湖里）セメント工場の労働構造研究は、植民地朝鮮における労働の科学的管理の好例である。ヨンヒル・カン自身がそうであったように、朝鮮の工場労働者の大多数は固有の文化規範を持った農民の出身だったが、工場の生産性に適合させるために従来の規範は破壊され、改造された。パクは次のように記している。

…工場労働そのものが新しい経験だった。一年を通して、食事休憩を除いた一日八時間を一つの場所で過ごすことによって、激しい不安が引き起こされた。始業時間と終業時間にきっちりと従うことを学ぶのにも、多くの努力を要した。そのうえ労働者たちは、恐ろしげな機械と複雑な設備に囲まれて働くという、緊張と

恐怖心を克服しなければならなかった（八九頁）

スンホリはまた、労務管理が内挿された、複雑な民族間の緊張とヒエラルキーの場でもあった。労使は歴史的にしばしば対立してきたが、日本人管理者たちの監視下で朝鮮人低技術労働者たちが働く植民地の工場内において、この弁証法はさらに際立った。能力の高い朝鮮人労働者の地位上昇が厳しく制限されていたため、日本の管理者たちはしばしば、敵対的とまではいかないまでも嫌々耐えている朝鮮人労働者たちに対処せざるを得なかった。

経験や公式的な地位とは関係なく、いつも朝鮮人たちは何よりもまず朝鮮人であるという事実によって規定された。そんな彼らは、植民地出身者として甘んじなければならない社会的排除と軽蔑について、深く内省せずはいられなかった。民族別に分けられた植民地労働市場における自らの位置づけを、日常的に思い知らされたのだった。（九九頁）

パクはテイラリズムと名指ししてはいないが、小野田スンホリの描写からは、科学的管理がすでにそこに足跡を残していたことは明らかだ。厳格な時間管理システムを例に挙げてみよう。

スンホリ工場は、出入場時間の正確さを期すためにタイムカードシステムを導入した。シフト開始三〇分前と開始時間のサイレンが、腕時計や時計を持っていなかっただろう大部分の労働者に注意をうながすために使われた。労働者はみなタイムカードを所持せねばならず、工場の出入場の際には、門前の警備員室にあるタイムレコーダーでカードにスタンプを押さねばならなかった。そのタイムカードは、二週間ごとに支払われる賃金の計算のために使われた。（九〇―九一頁）

アメリカの労働者たちはテイラリストの機械化方針に強く反対したが、賃金を得ることに汲々とし、かつ植民地支配を受けていた朝鮮人労働者たちは、ほとんど異議申し立てをしなかった。

『イースト・ゴーズ・ウェスト』では、これと酷似した、機械化された時間管理が描かれている。アメリカのあるデパートで一時的雇用で働いていた―それは彼が経験した数多くの仕事のうちの一つである―ハンは、そこでの規則の厳格さをこのように観察する。

デパート内での日々というものが、すべての人々にとっておぞましいものだと気づくのに、そう時間はかからなかった。身の毛がよだったのはその画一化だった…従業員はみな、名前の代わりに番号を持っていた。その番号は壁の上のカードに記されており、番号が振られた他の多くのカードと一緒に並べられていた。帽子やコートを脱ぐよりも先に、そのカードに打刻しなければならなかった…一日に四回、その番号が出たり入ったりする度に、機械に通さなければならなかった。（二八九―二九〇頁）

デパートの管理についてのこの手厳しい描写は、推定されるテイラリズムのパワーをはっきりと示している。だが、ヨンヒル・カンのより大きな批判対象は、テイラリズムの世界的な広がりだ。科学的管理における生―権力（バイオ・パワー）（フーコー）に、ハンは同意することだろう。管理イデオロギーには境界も国家もない。それは、その主体＝臣民を監視するばかりではなく、積極的に彼／彼女をローカルな境界性（リミナリティ）に押し込む技術なのだ。[13] この小説においては、時間を刻む職長のストップウォッチは、東アジアおよび米国の朝鮮人の主体＝臣民につきまとう。

日本のプレゼンス

このような背景のなか、ヨンヒル・カンとその分身であるハンは、アメリカ海岸に到着したのだった。そこは「よりよい生活と充足を欲する個人主義者が生まれる場所」（九頁）である。日本の支配下にある朝鮮での制約された生活から逃避したハンは、主体性を獲得するため、ニューヨークという実力主義のコスモポリタン都市で民族／国民意識（ネイション・フッド）を超越しようと試みる。しかし彼はすぐに、「アメリカ的能率」のロジックに取り込まれたうえ、「東洋の米国人（オリエンタル・ヤンキー）」となることを強要されていることに気づく。ヨンヒル・カンはテイラリストの論理を、日本の亡霊を通していくつかの方法で描き出す。まず、日本は個人を抑圧する場、アメリカは自由の場といった二項対立が誤りであることを明らかにする。次に、両者の類似性と近似性を示すため、アメリカの生活と文化の観察を通して日本を検証する。さらに、「テイラリスト帝国主義国家」と「テイラリスト資本主義国家」との違いを、とくに民族的マイノリティに注目して描き出す。そして、テイラリスト資本主義のプロジェクトが、商品化の過程の一つとしてこの〝民族の差異〟を悪用するさまを示す。最終的には、ハン

の学問の追求が脱構築される。学問の道に進むことは、植民地朝鮮を連想させる馬鹿げた努力である。日本支配下の教育システムでのハンの経験が、アメリカ的実力主義の幻想を打ち砕くのだ。

ヨンヒル・カンは、ハンの初期のアメリカ体験を、すばらしく高尚でこの上ない喜びとして描く。だが、それはその対価を払えるうちだけのことだ。所持金が霧散するや、ハンはニューヨークのホームレス向けのシェルターで、落伍者たちとともに暮らすことになる（「これに比すべき唯一の経験は、〈三一運動の際に〉日本人たちによって作られた監獄に入ったことだ」）。それでもまだ、ハンのアメリカへの熱狂は揺るがない。彼にとって心地よかったのは、仲間であるニューヨークの社会的のけ者たちが、個人として自立していることだ。同質性という悪臭をぷんぷんさせている朝鮮人収監者たち（「朝鮮の革命家たちは、一つにまとめられた感情、すなわち抑圧に抵抗する激しくぎらぎらした情火のために、そこに収監された」）に対し、アメリカの脱落者たちは「髄のない茎のよう」である。この「街の屑である彼らをここに掃き集めた力は、それとほとんど逆のもの、つまり個人の分裂なのだ」。この印象的な表現でハンは、「この時代の新たな世界を手中にする」ことに慰めを見出す。そこは「個人の分裂がその統合と同じく可能で、みながみな社会有機体とともに死なずともよく、日本でのように朝鮮人全てが猛然と立ち上がり、一人の闘士となることもない（二二頁）」。ハンは主体性という概念の虜になるあまり、朝鮮での政治的な結束よりも、アメリカでの個人化された貧困がよりましだと考えるのだ。

民族的な抵抗の場としての日本は、朝鮮人たちを単一のものへ、つまり「一人の闘士」へと変形させる、均質化の力として機能する。それは、アメリカ国内の朝鮮人たちにも引き継がれている。小説の前半に出てくるユニークな登場人物、チンワンの場合を見てみよう。日本で教育を受けたチンワンは、国家を超越し、民族の皮膜を突き破ることができる。

> チンワンは、日本が朝鮮を支配下に置くずっと前に日本に移住し、住み着いた。子どもの頃から日本の学校に通い、京都帝国大学で学位を得た。あらゆる面において彼はひじょうに日本化されていた。日本人の友人たちの多くは、彼が朝鮮人だということすら知らなかった。だが彼は朝鮮語を話したし、朝鮮についてよく知っていた。彼は今現在、朝鮮人と関わりを持ちたがっていた。おそらく朝鮮人女性と結婚したばかりだったからだろう（六五頁）

チンワンの一風変わった生い立ちは、渡米前に日本で教育を受けたヨンヒル・カン自身（そしておそらく主人公のハン）の投影だ。チンワンが他の登場人物たちと異なるのは、二つの世界を（おそらくナイーブに）股にかけるという選択を、その超越性が含む政治的インパクトに気づかないまま行っているためだ。[14] ハンの描写からは、チンワンの曖昧模糊とした立場がうかがえる。チンワンは「日本化」されているとはいえ、朝鮮語を話すし朝鮮についてよく知っている。認識論的な枠組みの欠如のゆえに、ハンには複数の場所に位置するチンワンのアイデンティティを充分に表現することができない。朝鮮人であり日本人である、あるいは朝鮮人でも日本人でもない、としか言えないのだ。非政治的ではあるが温和な人物であるチンワンは、そのふらふらした政治性のために、民族主義者のミスター・リンによって文字通り身動きが取れなくされてしまう（実は、ミスター・リンはチンワンに好意を持っており、彼への攻撃についても、「個人的には何の反感も持っていないんだ」（六八頁）とこっそりとハンに打ち明ける）。個人的な好意を抱いていたとしても、ミスター・リンと朝鮮人移民のコミュニティは、チンワンの混血性を朝鮮の拒否もしくは裏切りとみなす。ナショナルな政治とは、それが人々を一つにまとめる時でさえ、人間性を剥奪するよう奮い立たせる力を持つ。ハンはこれをきっぱりと拒絶する。

ハンはそれ以来、チンワンを攻撃するような朝鮮人協会とは関わり合わず、表面上は日本の全体主義政治から逃れる。そして主体性を獲得するという望みをかけて、アメリカの別の部分へと目を転じる。しかしこの小説の曖昧な結末からは、ハンが自分探しに成功したかどうかは定かではない。それを書く代わりにヨンヒル・カンは、アメリカを日本と同じように非人間的で非個人主義的なものとして描き出している。

エスニック・アメリカにおけるテイラリズム

ハンは、ニューヨークの朝鮮人協会（インスティチュート）の他にも、似たような全体主義勢力があることに気づく。テイラリストの労働モデルに基づいて人種を創り出す、アメリカの奴隷〝制度（インスティチューション）〟だ。トマス・C・ホルトは、次のように奴隷プランテーションを叙述している。

> [それは、] 合理性と合理化の近代的美徳 [のモデルだ]。多くのプランテーションの元帳には、テイラーのそれと同じくらい細心の注意が払われた、日常業務

> と生命維持をめぐる計算の数々が連ねられている。〔中略〕時にそのような計算は、労働力の生物学的再生産を促す栄養とケアを奴隷たちに与えるよりも、一人の奴隷を死ぬまで使い捨て、替わりの新しい奴隷をアフリカから買う方が安上がりだという決定に至ることになった。（三五、三六頁）

黒人性（ブラックネス）の構築は、奴隷解放に際しても旧式の経済モデルと結びついたままだった。歴史的に単純労働に紐づけられた黒い身体は、資本商品と見なされ、純粋労働へと追いやられた場しか占めることができなかった。ここに日米の明らかな違いがある。資本主義システム内におけるテイラリストの論理は、単純労働かつ資本商品であるということを示すために、肌の色という、最も端的に違いを表すものを使う。日本においても朝鮮人の身体は単純労働と連結させられるが、その目的はだいぶ異なった。機械化する力としてのテイラリズムは、朝鮮人の身体を〝帝国機械〟へ統合する。たとえば日本は、朝鮮人の身体を日本そのものに取り込むこと―不誠実なものだったが―に努めた。植民地朝鮮では、朝鮮人の日本人への改造を意図した内鮮一体政策というプロパガンダキャンペーンが行われた（S.Kim 二四頁、Lee 九頁）。一方、アメリカの奴隷主たちにはそのような意図は一切なかった。奴隷の身体は、つねに他者化された客体だった。より大規模な植民地や資本主義のプロジェクトと連結した労働者の機械化こそが、人種化された身体の占める場を決定したのだ。

ハンが知り合った何人かのアフリカン・アメリカンたちも、一様にブラックネスに規定された場を占めている。ローレンゾは平日に、シュミッツ家の住み込みコックとして働いている。ある週末、彼が酔って自らの停滞した社会的地位に怒りをぶちまけているのをハンは目撃する。「僕はウィリアムズカレッジに行ったんだ。ワシントンカレッジにも。ここには、ハーバードに行くためにやって来た…でもニガーが得意なのは、料理と給仕だけなんだ。それだけさ」（二六二頁）。ここでヨンヒル・カンは、シュミッツ家の屋根の下でかつかつの生活を送るために彼が演じなければならない、彼の二重の役割を浮き彫りにしている。日中のローレンゾはおべっかを使う「家の奴隷」を演じるが、夜のプライベートな時間にはその見せかけを脱ぎ捨て、ホワイトネスを超えるという野望を露わにするのだ。

ローレンゾと同じく教養のあるワグスタッフは、もっと効果的に怒りを表現しうる人物だ。ポーターやエレベーターマン、あるいはミンストレルショー〈白人が黒人に扮して行うショー〉のコルネット奏者として働いてきた彼は、不

満を抱えている。教育をいくら受けても、それが社会的にも経済的にもほとんど意味をなさないということを知っているからだ。ワグスタッフは苦々しく尋ねる。「学のあるニグロに、このアメリカで何ができるというんだ?」(二七三頁)。たとえ資本主義システムに誠心誠意関わったとしても、労働者としてその経済的対価を得る見込みがほぼないことを、彼は理解しているのだ。

ハンは、ニューヨークのボヘミアン・ビレッジでの若い進歩派たちの集まりで、モダニズムアートに造詣の深い、若く禁欲的な黒人知識人のアルフレッドに出会う。クンジョン・リーが指摘するように、「アルフレッドの世間離れした行動に至極迷惑している」「酔っ払いのボヘミアン」(三三六頁)であるサリーは、彼にいらついている。彼女にとってアルフレッドは、「どうみても教養がありすぎだし、倫理と文化的規範に束縛されていて…「ニグロ」でない。なぜかといえば、彼は黒人という自分の人種に対して不誠実で、ボヘミアン・ビレッジの人々よりも白人らしいからだ」(三三七頁)。ハンは、自分とキムとアルフレッドの三人が、仲間内で最も静かな者同士として連帯していると綴る。だが、白人中心社会のアメリカにおける、アフリカン・アメリカンとアジアン・アメリカン認識の間に、明白なつながりがあるとは書いていない。

ロレンゾ、ワグスタッフ、アルフレッドの三人は、創り出された人種別役割と闘う途上における、異なる地点をそれぞれ表象している。ロレンゾの二重性は彼を引き裂く。ワグスタッフの持つ教養は「ニグロ問題」の熟考を可能にするが、それによって彼は自縄自縛に陥る。アルフレッドが行っているような現存システムへの全面的な関与は、まさにその結果として、それが不幸にも非効率的であることを暴いてしまう。仕事上の地位や、厳然と線引きされた境界を超えての職業選択の不可能性によって、三人が三人とも否定された主体だということが示されている。

アメリカ国内の朝鮮人の身体は、これとはやや異なる場を占めている。黒い身体が純粋労働を表すものである一方、資本主義の文化的ロジックは、朝鮮人の身体をアジアについてのより大きな言説へと接ぎ木する。黒人奴隷たちが身体と労働の両方を商品化されたのに対し、アジア人たちはハワイへプランテーション労働者として、あるいは米国本土へ非熟練工として、自らの意思でやって来た(Takagi 一三二―一七六頁、Chang 三―二三頁)。黒人労働者もアジア人労働者も商品として売られたが、アジア人の身体は、アメリカの労働力貿易の文脈の中に位置づけうるような交換価値を持たなかった。そのうえ、急速な近代化を高らかに宣言した日露戦争での日本の勝利により、資本主義によ

る〝人種〟の構築は疑問視されるようになった。東洋が西洋に対抗しうるという事実が認知されると、一時的に文化フェティシズムが起きた。アジア、とくに日本の製品は、文化資本の度合いと結びつけられるようになった。[15] 資本主義プロジェクトにおいて〝アジアの差異〟が有する移植性(ポータビリティ)は、ここでテイラリスト的傾向へぐっと傾いた。

ハンは、ボニュア長老の宗教共同体の中に飛び込む。この経験からハンは、テイラリストの様式を内面化して住民たちを手助けすると主張するような、特定民族居住地への批判を導き出す。この世界は表面上、ブラックネスと単純労働を直結させるような人種差別など行いそうもない、魅力的で自足的なシステムのようにみえる。労働者が科学的に選別されるべきというテイラーの主張と同じように、ボニュアはそれぞれの仕事が確実に適切な人材に与えられるよう采配をふるう。ハンは長老を「その才能の大部分を、適材適所に人を配置することに振り向けている。ボニュアはこのことに天才的に長けており、信者たちはみな幸福で勤勉にみえる」と評する。ハンは「みなそれぞれに仕事を持っているのを見た。ボニュアに相談せずに新しい仕事に就くことはなかった」(三三五―三三六頁)。しかし、ボニュア以外はみな平凡な労働者のままで、個人的な成長や行為主体性(エージェンシー)の余地はない。彼らの世界は、「あらゆる創意を殺す奴隷制のような」(三三六頁)、虚飾の世界なのだ。

クンジョン・リーは、ボニュアについて、支配下に置く信者たちに労働させるために宗教的レトリックを用いるトリックスター的人物で、「長老は基本的には詐欺師である。神の讃美やアフリカン・アメリカンの地位向上よりも、金儲けに関心のある「宗教にかこつけた詐欺行為」だ」(三四四頁)と論じる。またステファン・ナドラーは、「ボニュアと彼の話し方は、他のどんな「アメリカ式」にも劣らず非正統的―それと同時に正統的―なのかもしれない」(一〇四頁)とし、ヨンヒル・カンが、後述する百科事典のセールスマンD・J・ライブリーを手本にボニュアを造形したと論じる。

ボニュアはこれら全てに当てはまるのかもしれないが、その行動は〝資本の教会〟での洗脳による症状だ。彼は、新しい〝主人と奴隷の弁証法〟において主人の役割を果たす。オリジナルと唯一異なるのは、肉体的な罰の代わりに精神的で宗教的な脅しを使うという点だ。フランツ・ファノンの言葉を借りれば、ボニュアは「ごくたやすく、植民地期の遺産である不公平な有利さ」を手に入れ、自身の利益のために人々を搾取する。ハンの人種的な差異は、宗教の奇跡的パワーの証拠として、ボニュア自身を個人的に利するために使われる。ハンは、「チャイニー」〈中国人の蔑

称）ということで聖人たちの団体に組み込まれる。伝導集会でのスピーチの終盤、聴衆たちはその内容よりもハンが英語を話すという、まさにその事実に深く感動する。「…人々はただ、彼らの中国人のステレオタイプを覆す、雄弁な朝鮮人という「奇跡」にのみ注目するのだ」（Knadler 一〇四頁）。聴衆たちは、ハンの英語が上手なのは自分たちの従うシステムが完璧だからだと考える。天からの「奇跡」というわけである。この論理の前では、ハンがいかに論理的に見えようとも、いかに説得力を持って自らの教養を誇示しようとも、その努力は同語反復になってしまう。ボニュアは自らの組織を強化するため、人種の修辞法において機能するよう、科学的管理法を使って人種的差異を持つハンを選ぶ。アメリカのテイラリズムにおいては、ハンの労働はアジアでのそれほどは重要視されない。自らの知能労働が尊重されないことに気づいたハンは、その共同体を捨てるという背教行為を行う。ボニュアが露骨に「ピアース・アローの新車」を欲しがるのを見て、ここでは知的探求に用はないことを悟ったのだ。知的探求などは、せいぜい物質的商品を追求するときの一つの要素としてつけ加えられるだけだ。教育と労働と人種は、資本主義に奉仕するテイラリストのシステムに領有（アプロプリエイト）／流用される。主体性がそこに入り込む余地はないのだ。

ボニュアのシステムは、民族間の擬態を示唆しもしている。なぜならそれは、それ以前に行われた人種売買の策動、つまりハンが移動セールスマンとして雇われた出来事とパラレルな関係にあるからだ。ハンは当初、怪しげなペンを売りつけようとD・J・ライブリーのオフィスにやってくる。だがすぐに、ペンと同じくらい無価値な百科事典『普遍的教養』のセールスマンにならないかという彼のセールストークによって、ハン自身が売られてしまうことになる。最初にハンがペンのセールストークをした際、ライブリーはそれを購入する。だが、それは慈善の精神からではない。自分の巧みな弁舌のおかげで売れたと勘違いしている、疑わしそうな顔つきをしたハンに向かって、彼はこう説明する。「君はすでに君自身を私に売ったんだ」。彼はペンの購入という初期投資よりもずっと価値のある、「ハンの身体」を買ったのだ。それからライブリーは、ハンの身体上に描く物語を組み立てる。「本を売る東洋人セールスマン…大学生でありながら生活費を稼ぐ、上品でこぎれいなクリスチャンの若い東洋人」（一三四頁）。ライブリーはハンがひどく出来の悪いセールスマンだと考えているが、ハンのアジア人という差異を、新たに発見された市場シェアの開発のために利用する。セールスマンとしての能力などはどうでもよい。セールストークの際にハンの身体が帯びる意味

―大衆の意識にそれはすでに染みついている―こそが、本を売るのだ。デイビッド・パルムボーリウは、「その身体は差異の記号であると同時に、ある特定の経済内部での交換の象徴である」（一二二頁）と述べる。たしかに、ハンが『普遍的教養』を売ることができるのは、明らかにその人種のおかげなのだ。

ライブリーやボニュアとの出合いは、ハンの雇用パターンを象徴している。ハンは能力ではなく、人種という資源を持つために雇われる。彼の効用は、単に商品の正統性を伝達することだ。そこには人種、資本主義、テイラリズムの相互関係がある。仕事を得るための惨めな初挑戦で、ハンは郊外の白人女性に下人として雇われることになる。その女性がハンを雇ったのは、彼の能力ではなく東洋人という価値のためだ。ハンの帯びる意味は、彼女の言葉にはっきりと表れている。「前にいたコックは、ものすごく背の高いニグロだったの。二人分の仕事をすることができたけど、私は外に出しても恥ずかしくないようにあなたを雇ったのよ」（五九頁）。パルムボーリウは、「東洋人」の「外に出しても恥ずかしくない」という特性は、「ニグロの生産性よりも高い価値を持つ」（一一九頁）と論じる。ここで起きているのは経済行動である。女性が「ニグロ」から得るのは労働だけで、それ以外のものはほとんどない。黒い身体は、労働のほかは全く文化的価値を意味しない。それは労働そのものなのだ。一方でハンからは、労働ばかりでなく飼い慣らされたオリエンタリズムという付加価値も得られる。後日、デパートの東洋商品売り場のセールスマンとして、ハンはインチキ臭い商品を本物らしく売ることになる。ハンは陶磁器（チャイナウェア）売り場に配置される。その理由は明らかで、たとえハンが陶磁器の品質の粗悪さと偽物性をよく知っていたとしても、彼の身体がそれらに正統性を与えるからだ。テイラリストの論理においては、専門化のものさしとなるのは、知性や技術ではなく人種なのである。

テイラー化された教育

ヨンヒル・カンの叔父は次のように言ったという。「日本は西洋の科学で朝鮮を征服した。再起を図ろうとするなら、私たちも西洋の学問を学ばねばならない。行くんだ。旅に出なさい。貧困と困難にぶつかっても、西洋の知識を習得するんだ」（"When" 一一〇頁）。叔父のこのような切願により、ヨンヒル・カンは個人と国を解放するために必須となる教育を追求した。彼の小説の主人公は、ミッションスクールや日本の学校で教えられる〝西洋の学問〟こそが、「よりよい生活を欲する個人主義者」を創出すると信

じる。アメリカで、朝鮮の片田舎でのそれを連想させるような障壁にぶつかったとき、ハンはそれを自分が知るただ一つのものさしである〝教育〟によって測ろうとする。物語が進行するにつれ、ハンはアメリカにおける教育が、彼を日本から逃避させたのと全く同じシステムに従属していることに気づく。教育によって人種を超えようという試みは、〝人種〟も〝教育〟も同じ全体構造の要素である以上、無益なのだ。

一九四六年に書いた文章でヨンヒル・カンは、階層移動を制限するという、制度化された保護策を持つシステムの内部で教育を受けることが、いかに空しいものだったかについて振り返っている。「朝鮮に科学と産業の発展が欠かせないことは、みな知っている。エンジニアリングの分野以上に前途有望なものが他にあるだろうか？　だが、ここにもやはり難問があった。日本人たちの下で働く朝鮮人エンジニアには、重要な契約が一切取れないのだ。たとえ仕事が取れたとしても、給料は同じ訓練を受けた日本人の一〇分の一にしかならない」（"Prelude" 一二―一三頁）。友人でもあり先輩でもある厭世的なキムは、ハンよりもずっと前から真実に気づいている。大学の学位を取りたいというハンに、キムは忠告する。

君は色々なことを少しずつ学ぶだろうが、ほとんど得るものはないだろうな。大学を出るまで考える余裕もないだろう。アメリカの教育方法というのは、表面的な事実を学ぶといったものだ。綿密でもないし深くもない。幅広く浅いんだ。ニューヨークの地下鉄に入るようなものだ。あいつらはあまりにも多くを教えようとする。デアボーンの集合工場と同じだ。ビジネスの手法なんだよ。フォードのようになるにはいいだろうが、学者になるためのものではない。乾燥した、機械的で退屈な空気さ！（一六〇頁）

アメリカの教育に対するキムの批評は、ハンが文字通りフォード式の製品となるだろうことを鮮やかに示している。キムの警告を聞き入れられない、もしくは聞き入れようとしないハンは、次のように応じる。「まあ、僕が大学に行って何かを学ぶまでは何もできないだろうな…コック、ウエイター、皿洗いといった仕事すらもな。大学を出たら、アメリカの文明や文化を理解し始めるのかもしれない」（一六〇頁）。教育へのロマンにハンは信頼を抱き続ける。教育こそが、目的のための手段だと信じているのだ。

資本主義が教育の流用に成功していることを熟知するキムは、戦略を転換し、頑固な後輩に向ってもっと実際的な

アドバイスをする。

生活のためなら、アメリカ式の学問よりも東洋の学問の方が役立つだろう。まあ、今こう考えるのは奇妙に感じるかもしれないが。…でも、そういった分野だと君は有利なんだ。競争も激しくないし…。これが、移民した研究者としてぼくが示せる唯一の道だ。君が首尾よく生き残るためのな。（二五七頁）

キムは、機械化されたシステム内で人種が果たす機能を知っている。それゆえハンにそれを利用するよう差し向けるのだ。それでもハンは、人種の構築にまつわる苦難にさらされたままだろうが、少なくともうわべ上は行為主体性（エイジェンシー）を持つことができる。

旧植民地出身者であるハンは、ほとんど前に進むことができない。ヨンヒル・カンは、これと似たような戦略を試みた友人のケースを、次のように想起している。「大昔、アメリカで農業科学を修めた朝鮮人の知り合いがいた。彼は農業改良への大いなる希望を胸に、朝鮮に戻って来た。夢を叶えるためにそこで一五年間格闘した後、救いようのない失望のうちにそれを諦めた」（"Prelude" 一二頁）。ハンにとっての日本は、西洋の学問への初めての接触を媒介する場だったが、国境を越えた労働能率は、経済モデル、人種、教育を通してハンについて回る。

ハンの旅は、被抑圧者たちがたむろする地下シェルターに戻るという漠然とした夢の連なりで終わる。それは、ハンの無条件降伏と破滅を示唆するものだ（Walter Roh 一八二―一八三頁）。この小説の陰惨とした結末は、冒頭の熱狂的で非現実的なほどの楽観主義とは対照的である。このシステムの中では主体性を獲得することができないことを、ハンは悟る。そして恐れた通り、「殉教の無意味さ」（*East Goes West* 九頁）の下で、個人主義者としての自分自身が消えてしまったことに気づく。

テイラリズムは、機械化および役割構築のシステムとしての柔軟さを持つ。その柔軟さは、国家、経済様式、文化ロジックといった大きな目標への適用を可能にする。アメリカも日本も、人種化された主体＝臣民（サブジェクト）を利用することで社会経済的な対話を行うが、それによって〝朝鮮人の身体〟は従属させられる。

帝国日本からアメリカへの逃避は、それぞれの地域の近代主義者たちのプロジェクトにおける差異（植民地主義から資本主義へ）―その達成のために使用されるシステムは同じだが―に過ぎない。このことにハンが気づくのはあまりにも遅かった。日本は植民地の主体＝臣民から人間性を

奪う。アメリカでは、朝鮮ナショナリズムに直面したとき同様の均質化が起こる。ハンは主体性を追求するためにアメリカへ逃れたが、そこにはさらに悪質なバージョン、すなわち均質化のためのより効率的な手段があることに気づく。それは、境界線を引かれた差異がセールスポイントであることを知っており、その利用を奨励しさえするものだ。

本稿は、『イースト・ゴーズ・ウェスト』における〝日本〟をめぐる、研究上の空白を埋めるものである。これは、第三の国家の行為者（ナショナル・アクター）たちのプレゼンスを重視する、トランスナショナル・アジアン・アメリカン文学研究にもつながるものだ。このような作業なしには、アジアン・アメリカン研究は致命的な盲点を抱えながら進むことになろう。コーシーの言を借りれば、私たちは「民族性（エスニシティ）が、以前のように国民国家のパラメーターの中ではなく、いくつものローカルとグローバルな場で次々と生産されるような、国家を超える時代に突入した」（三一六頁）のだ。カンディス・チューは、「多数の場所の歴史と年代記が重大な有効性を持つことを、批判的に認めること。それは、イデオロギー操作を行う制約物だといって、〝アメリカ〟を〝アジア〟から引き離すことで生まれる知には、限界があると認めることだ」（一一一頁）と指摘する。批評家たちは学問の地方主義を回避するために、アジアン・アメリカン文学におけるアジアの重要性を認識しなければならない。とりわけコリアン・アメリカン文学は、アジアン・アメリカンの主体性を定義する際に帝国日本が担う役割――意識しようがしまいが――についての研究の、豊かな場所であるといえる。[16]

＊この論文の翻訳にあたり、科研費特別研究員奨励費14J40074の助成を受けた。

注

（1）ヨンヒル・カンのアメリカ物質主義への批判的スタンスについては、これまで何人かの研究者が詳細に論じている。ジョアンヌ・H・キムは、この作品が「アメリカ資本主義機械の非人間的側面」と「アメリカのリベラルや左派団体にさえ浸透しているレイシズムを批判するため、アメリカ社会のパノラマを映し出している」（五五頁）と述べる。ウォルター・ロウは、主人公ハンのアメリカ移住体験における喪失に焦点を当てる。ハンの野心は初めは学問的な知識を得ることだったが、それはしまいには「強迫観念的な物質主義の生活と、朝鮮との精神的紐帯の喪失」（一八二頁）へと悪化する。デイビッド・パルムボーリウは、無用な

百科事典――その価値は〝アジア人の身体〟によって表象される――の販売における、民族（エスノカルチュラル）―文化商品化の実践について検証する（一二三頁）。三者とも、ハンが価値を置く教育や文学や美学よりも資本商品が特権化されるという、非人間的な帰結について論じている。

（2）総力戦に必要な産業労働力と製品を供給するために植民地を近代化することは、帝国日本のプロジェクトの一部であった。しかし、こういった言説は最近ではより複雑で注意を要するものとなっている。植民地をいつも遅れたものとして貶め、外部の権力をつねに近代的なものとみなすことに対する批判の声が上がっているからだ。Tani. E. Barlow の論考を参照。

（3）（第二次世界大戦中に）ヨンヒル・カンは、米国内の反日感情を高めるための一連の記事で、植民地朝鮮の人々に対する日本の残酷な仕打ちの数々を描いた。また彼は、極東の米軍政で広報官として軍の広報活動を行った。ヨンヒル・カンのエッセイ、"Prelude" "Japanese Mind" "When" を参照。

（4）コリアン・アメリカやアジアン・アメリカのより大きな文脈の中で包括的分析をするために、日本という要素を考慮すべきだという提案は、厄介なものかもしれない。たとえば韓国の研究者たちは、植民地支配のトラウマの生々しい傷のせいもあり、植民地下の日本語作家たちを無視してきた。彼らは、裏切り者や協力者と見なされてきたのだった。植民地期に日本語で書いた作家たちへの関心が高まったのは、ごく最近のことだ。なお、本稿中の筆者の〝日本〟解釈は、コリアン・アメリカを複雑化し豊かにするものであって、決してそれを限定するものではない。

（5）一九〇〇年代初頭までに、ヘンリー・フォードとフレデリック・ウィンスロー・テイラーの二人は、効率、スピード、節約を期待させる生産哲学の到来を告げた。好景気に沸く市場、急速に変化する都市の人々は、製造工場からの大量の製品を欲した。ゆっくりした職人ベースの生産方式では、効率が悪いことが明らかになった。フォードとテイラーはそれぞれ、製造と管理に注目してシステム構築を行った。この新方式は産業界に革命を起し、大流行が終わる前に広く文化に浸透した。

（6）テイラー方式において四つの核となる原理は、真の科学としての管理の計画、労働者の科学的な選別、労働者の科学教育と育成、管理者と労働者間の親密で友好的な協同、である（Taylor 三六、三七頁）。

（7）デイヴィッド・ハウンシェルは、フォーディズムの

隆盛を、T型フォードで絶頂に達する長い行程として記述している。製造コストと増産に成功したフォーディズムだったが、そこには重大な欠陥があった。労働者たちはその非人間的な側面に断固として反抗し、三八〇パーセントを上回る売上高の急騰が起きた。工場労働者たちは、自らの身体を機械化したり、機械の世話係となったりすることを嫌った。管理側は、報奨金制度設置と賃上げによって労働者たちに埋め合わせをしたが、売上高は高止まりになり、管理者たちは労働関連の他の問題に対処することはほとんど出来なかった。製造工程を合理化する一方で、製造ラインシステムはその適用と技術革新にとって予期せぬ障害ともなった。製品の変更は、なるべくして順調な製造プロセスの支障となった。生産性の鈍化とコスト増を意味する変更は、フォーディストの信条からは許しがたいことだった。そのため、T型フォードの新型はなかなか生産されなかった。このことが後にフォーディズムの凋落につながった。というのも、より高価な、もっと多くの特長を持つモデルに買い替えたいという、消費者の欲望に応えられなかったからだ。

(8) ハウンシェルは、文化評論家たちがフォーディズムに対し、個性にも、知的自由にも、民主主義にも何らの影響を与えないと厳しく批判したと書いている。オルダス・ハクスリーは『すばらしい新世界』(一九三二年)で、フォードを神話の神に、フォーディズムを何事にも無関心な労働者だらけの停滞した社会の支配宗教に配し、フォーディズムを皮肉った。チャーリー・チャップリンは、デトロイトの自動車工場を二、三カ所見学し、後に暴君的な組立ラインを批判する映画「モダン・タイムス」(一九三六年)に主演した。これは、チャールズ・ディケンズの産業主義批判『ハード・タイムズ』(一八五四年)に影響を受けたものだろう。アプトン・シンクレアは『フリバー・キング』(フリバーはT型フォードの愛称)(一九三七年)で、フォードと労働者たちとの関係を検証し、フォードをデトロイトとその家族を破滅させる大きなシステムの一部として描いた。

(9) ウィリアム・ツツミは、テイラリズムが導入された際、一九世紀のアメリカと日本が驚くほど似通った道を辿って発展したと指摘する。両国ともに、職人ベースの方式に代わる、より効率的な方法を模索していた。当時の日本は、労働者たちのペースや流れを決める〝親方〟に大きく依存した、間接的な管理手段を採用していた。『科学的管理の原理』が出版されると、日本の産業界はいち早くこれを歓迎した。

(10) 京都学派の学者たちは、日本の精神は西洋人たちよりも効果的に科学技術を使いこなせると主張した。それは、西洋の超越を可能にする〝日本的精神〟(曖昧ではっきりしない用語である)によって導かれる融合体の、二つの要素だとした。

(11) ニューヨークの地下に響く研削機の騒音を際立たせるため、ヨンヒル・カンはこの小説を、朝鮮とアメリカの対照的な描写から始める。有機的伝統があり、歴史が古く、物質的には貧しいが心豊かな都市として朝鮮は描かれる。一方のアメリカは、「アメリカはまさに機械化時代の記念建造物」(六頁)だという事実を証明するような、高くそびえたつ「バベルの塔の街」と描写される。

(12) 日本の歴史家たちが明らかにしてきたように、明治維新と明治時代(一九六八年〜一九一二年)には、日本の急激な近代化と一部の西洋科学の導入が大々的に行われたが、西欧列強との異花受粉の種はそれよりもずっと早くに蒔かれた。Marius B. Jansen(二六四—七〇頁)、Carol Gluck(一八—一九頁)を参照。

(13) 日本語の流暢な朝鮮人というのは、この時点ではありふれたものだった。日本が教育システムにおいて日本語使用を強制し、朝鮮語を禁止したからだ。したがって、チンワンの言語的器用さは特筆すべきことではない。だが、その単一のナショナル・アイデンティティーの拒絶、というのは特殊といえよう。

(14) フーコーのバイオ・パワーについては、Foucault(一四一頁)参照。

(15) 一九世紀後半のアメリカ文学には、日本の大国としての隆盛を示す証拠が数多く見られる。ウィリアム・ディーン・ハウエルズは、日本が素晴らしい文化商品をもつ地であり、ヨーロッパに比肩する観光地だと記している。スイ・シン・ファー(エディス・イートン)とオノト・ワタンナ(ウィニフレッド・イートン)の姉妹(英国人の父と中国人の母の間に、カナダで生まれた)は、アジア系英米人のヒエラルキーにおける、日本の地位の高さを明らかにしている。エディス・イートンは、ある白人男性の求婚者が、中国人と白人のハーフである彼の婚約者に、日本人として通すように頼んだという出来事を描いた(一二一—二二頁)。ウィニフレッド・イートンは、*The Heart of Hyacinth*(一九〇三年)や*The Wooing of Wistaria*(一九〇二年)といった小説で、自分が訪れたこともない日本のペンネームと人格をでっちあげて日本につ

いて書いたことに、不安感を表明している。

(16) たとえば、ロニョン〈朝鮮語読みはナニョン〉・キム『土壁（*Clay Walls*）』（一九八六年）、チャンネ・リー『ジェスチャー・ライフ（*A Gesture Life*）』（一九九九年）、スーザン・チェ『外国人学生（*The Foreign Student*）』（一九九八年）では、さまざまなレベルで日本の植民地主義の遺産に取り組んでいる。

引用文献

Barlow, Tani E. "Introduction: On 'Colonial Modernity.'." *Formations of Colonial Modernity in East Asia*. Ed. Barlow. Durham: Duke UP, 1997. 1-20.

Chan, Sucheng. *Asian Americans: An Interpretive History*. Boston: Twayne, 1991.

Choi, Susan. *The Foreign Student*. New York: Harper Flamingo, 1998.

Chuh, Kandice. *Imagine Otherwise: On Asian Americanist Critique*. Durham: Duke UP, 2003.

Fanon, Frantz. *The Wretched of the Earth*. New York: Grove, 1963.

Foucault, Michel. *The History of Sexuality, Volume 1: An Introduction*. Trans. Robert Hurley. New York: Vintage, 1980.

Gluck, Carol. *Japan's Modern Myths: Ideology in the Late Meiji Period*. Princeton: Princeton UP, 1985.

Holt, Thomas C. *The Problem of Race in the 21st Century*. Cambridge: Harvard UP, 2000.

Hori, Kazuō. *Chōsenkōgyōka no shitekibūnseki: Nihon shihonshugi to shokuminchikeizai* (A Historical Analysis of Korean Industrialization: Japanese Capitalism and the Colonial Economy). Tokyo: Yuhikaku, 1995.（堀和生『朝鮮工業化の史的分析』有斐閣、一九九五年）

Hounshell, David. *From the American System to Mass Production, 1800-1932*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1984.

Howells, William Dean. *A Hazard of New Fortunes*. 1890. New York: Penguin,2001.

Jansen, Marius B. *The Making of Modern Japan*. Cambridge: Belknap, 2000.

Kang, Younghill. *East Goes West: The Making of an Oriental Yankee*. 1937.

New York: Kaya, 1997.

—. "The Japanese Mind is Sick." *Tomorrow* May 1945: 39-41.

—. "Prelude to Korean Independence." *Travel* Sept. 1946: 9-13.

—. "When the Japs March In." *American Magazine* Aug. 1942: 42+.

Kim, Joanne H. "Mediating Selves: Younghill Kang's Balancing Act." Hitting Critical Mass: *A Journal of Asian American Cultural Criticism* 6.1 (1999) : 51-59.

Kim, Ronyoung. *Clay Walls*. 1986. New York: Permanent, 1987.

Kim, Sokpom. *"Zainichi" no shisō* (Thoughts on Zainichi). Tokyo: ChikumaShobō, 1981.（金石範『「在日」の思想』筑摩書房、一九八一年）

Knadler, Stephen P. *The Fugitive Race: Minority Writers Resisting Whiteness*. Jackson: U of Mississippi P, 2002.

Koizumi, Kenkichiro. "In Search of Wakon: The Cultural Dynamics of the Rise of Manufacturing Technology in Postwar Japan." *Technology and Culture* 43.1 (2002) : 29-49.

Koshy, Susan. "The Fiction of Asian American Literature." *The Yale Journal of Criticism* 9.2 (1996) : 315-46.

Lee, Chang-rae. *A Gesture Life*. 1999. New York: Riverhead, 2000.

Lee, Kun Jong. "The African-American Presence in Younghill Kang's East Goes West." *CLA Journal* 45.3 (2002) : 329-59.

Lew, Walter."Grafts, Transplants, Translation: The Americanizing of Younghill Kang." *Modernism, Inc.: Body, Memory, Capital*. Ed. JaniScandura and Michael Thurston. New York: New York UP, 2001. 171-90.

Lie, John. *Zainichi (Koreans in Japan) : Diasporic Nationalism and Postcolonial Identity*. Berkeley: U of California P, 2008.

Montgomery, David. *The Fall of the House of Labor*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.

Nevins, Allan, and Frank E. Hill. Ford: *The Times, the Man, the Company*. New York: Scribner, 1954.

Palumbo-Liu, David. *Asian/American: Historical Crossings of a Racial Frontier*. Stanford: Stanford UP, 1999.

Park, Soon-Won. *Colonial Industrialization and Labor in Korea: The Onoda Cement Factory*. Cambridge: Harvard UP, 1999.

Smith, Merrit Roe. *Harpers Ferry Armory and the New Technology: The Challenge of Change*. Ithaca: Cornell UP, 1977.

Sui Sin Far [Edith Eaton]. "Leaves from the Mental Portfolio of an Eurasian." 1890. *The Big Aiiieeeee!* Ed. Jeffrey Paul Chan, Frank Chin, Lawson Fusao Inada, and Shawn Wong. New York: Meridian, 1991. 111-23.

Takaki, Ronald. *Strangers from a Different Shore: A History of Asian Americans*. New York: Penguin, 1990.

Taylor, Frederick Winslow. *Scientific Management*. 1911. New York: Harper, 1947.

Tsutsui, William M. *Manufacturing Ideology: Scientific Management in Twentieth-Century Japan*. Princeton: Princeton UP, 1998.

Watanna, Onoto [Winnifred Eaton]. *The Heart of Hyacinth*. New York: Harper, 1903.

—. *The Wooing of Wistaria*. New York: Harper, 1902.

Yoichi, Ueno. *Ueno Yoichi den*. Ed. Misawa Hitoshi. Tokyo: SangyōNōritsuTankiDaigakuShuppanbu, 1967.

会の記録（二〇一四・九―二〇一五・七）

関西部会

第三五八回（二〇一四・九・一四）

報告・全ウンフィ「一九七〇～八〇年代のウトロ地区をとりまく地域運動の芽生え―一九七〇年代半ば～八〇年代半ばまでを中心に」

ウトロ地区では八〇年代後半から住環境に対する住民運動が展開されたが、その重要な担い手は日本人支援者であった。従来の研究では、日本人支援者の存在は周辺的・補助的なものとして捕らえられてきたが、本報告では何が彼らを動かし、集団的な実践を可能にしたのかに注目した。まず、七〇年代に環境、女性、反戦運動など多様な地域的活動の一つとして「朝鮮問題」が展開された点があげられる。しかし、彼らが実践した活動は、集住地域の住民の日常文化とは異なっていた。日本人支援者の活動が、ウトロを「身近な朝鮮問題」のための実践の場であったとすれば、住民の意識は民族共同体というよりその時代の生活の場であった。

第三五九回（二〇一四・一〇・一二）

報告・藤川正夫「ＷＡＮＴＥＤ！　かつての外国籍公務員・教育公務員！　―戦後の公立朝鮮人学校・分校及び民族学級の朝鮮人教員における〝教諭〟任用」

戦後も戦前から引き続き旧植民地出身の公務員が存在した。一九五二年の平和条約発効後、上級公務員は日本国籍を取得したが、それ以外はそのまま公務員として存在した。しかし、これに対する政府の統計はなく事実としてあまり知られていない。ただ、文部省が「学校基本調査」において外国籍教員数を調査しており、小中高校に外国籍「教諭」が存在したことがわかる。とくに、一九四八年と一九四九年の学校閉鎖令以降、公立の朝鮮人学校・分校や民族学級が設置され、そこに少数の外国籍の「教諭」が存在したことが明らかになっている。報告では、外国籍教員の差別任用問題を考えるうえで、五〇年代、六〇年代における外国籍教員の実像を明らかにする必要性を説いた。

報告・梁永厚「在日朝鮮人の子女教育史再考―朝鮮学校を中心に」

解放後の在日朝鮮人子女の教育の柱は民族教育である。